

議論の発展のために（その2）

—— 無論理的虚偽について ——

足 立 幸 男

目 次

第一章 ソフィストリー

第二章 不当な前提

第三章 無関係な結論Ⅰ（狭義における ignoratio elenchi）

第四章 無関係な結論Ⅱ（広義における ignoratio elenchi）

第一章 ソフィストリー

古典古代、アテネには、弁論術、とりわけ法廷における弁論術の教授を生業とする一群の人々が活躍していた。「ソフィスト」（Sophist）と呼ばれる人々が、それである。当時、弁論術は、市民が修めるべき素養の中でも格別重要な地位を与えられていた。それというのも、当時のアテネ社会が、現代人の感覚をもってしては想像すらできないほど「超民主的」な社会だったからである。国権の最高決定機関は一年に十回定期的に開催される「市民総会」（Ekklesia）であったが、それには成人の男子市民であれば誰でも出席し討論に参加することができた。また、市民総会を補完する「五百人評議会」⁽¹⁾（Boule）の構成員にしても、市民によって市民の中から主として抽籤に基づき選出されていた。市民自ら統治者であると同時に被治者でもあり、重要な事柄はすべて市民の討議によって決定され、実行さ

れる——これが、当時の姿であった。文字通り「自治」(autonomy)が実践されていたのである。それだけに、政治的野心を懐くほどの者は——そして、当時のアテネ市民はといえば、著名な政治思想史家・セイバインも指摘するがごとく、他人より余分に働き他人より裕福になることよりはむしろ、最低生活を維持するだけの労働しかせず、余暇のすべてを政治活動に捧げるのを理想とし名誉とするほど「政治的」な人間であった——、弁論術、すなわち、論争相手を打ち負かし、聴衆を説得するテクニックを人一倍身につけなければならなかった。さらに、同種のテクニックは、法廷で自己を弁護したり、被告を糾弾するためにも、そしてそのためには、よりいっそう必要であった。ちなみに、当時の裁判風景を再現すれば、告訴する側と弁護する側（といっても、法律を職業とするような人は当時いなかったから、当の告訴人と被告人）が、各々、自己の主張を展開し、それに基づきまず、審査員団（抽籤により選ばれ短期間その任に当るにすぎない市民五百人程度によって構成される）が有罪か無罪かを多数決によって決定、しかる後、告訴人、被告の各々が適当と思われる刑を陳述し、再び審査員団の中での投票により刑を確定する、というものであった。しかも、市民により市民の中から選出された人間が判決を下すのだからその判決は市民の総意を反映している、従って、誤りのあろうはずがない、ということであろうか、当時のアテネには、今日ほとんどの国において保障されている上告制度すら存在しなかったのである。以上のような次第で、弁論術は、当時のアテネ市民にとって、政治的な活躍のためにも、法廷で不利な扱いをうけないためにも、必要不可欠であった。また、そうであったからこそ、ソフィストがおおいにもてはやされたのであろう。

- (1) 大雑把に言えば、現代民主主義国家の内閣に相当するが、それは、行政機能だけにとどまらず、さらに、立法、司法の機能をも担っていた。
- (2) cf. George H. Sabine, *A History of Political Theory*, Henry Holt &

Co., New York, 1937 (邦訳、丸山真男訳、『西洋政治思想史Ⅰ』岩波書店、1953年)

ソフィストの中には、むろん、黒を白、白を黒といいくるめることに血道をあげる品性卑しい人物が何人かはいたであろう。だが、ソフィストにとってはまことに気の毒、というほかないが、アリストファネスの戯曲⁽³⁾やプラトンの対話篇等を通してしかソフィストの姿に接しえない後代の人々の間には、「詭弁家」、「不正な議論をこととするペテン師」というソフィスト像がすっかり定着してしまった。そののみか、「不正な議論の方法」、具体的には、「脆弱な議論を強力な議論にみせかけ、強力で正当な議論からその説得力を奪う不正なテクニック」が、一括して、「ソフィストリー」(Sophistry)なる普通名詞で呼ばれるようにさえなったのである。適切か否かはともかく、上述したような意味での使用法が「ソフィスト」、「ソフィストリー」という用語に関して定着している以上、そしてまた、かかる使用法を誤謬と断ずるだけの資料も持たないからには、われわれとしても、それを踏襲せざるをえまい。

(3) アリストファネスの戯曲『雲』の中では、ソフィストは、正義そのものではなく、自己の主張を正義と人々に信じ込ませることにのみ関心をもち、その結果、道義心、信仰心、伝統に対する畏敬の念等、それまでアテネ人を支えてきた崇高なるもののいっさいを崩壊に導く邪悪な人間、として描かれている。また、興味深いことに、この戯曲では、プラトンがソフィストに対置し、ソフィストと闘った高貴な人間として擁護せんとしたソクラテスその人が、かかるソフィストの頭領株と目されていることである。

(4) ソフィストを扱ったプラトンの作品は数多いが、その中でも代表的なものは、“Gorgias” “Euthydemus” “Sophist” “Statesman” であろう。

ところで、ソフィストリーを完全に免れていると自他ともに認めうるような人は、この世にいったい何人いるだろうか。われわれのほとんどは、多かれ少なかれ、また、意識すると否とにかかわらず、ソフィストではあ

るまいか。健全な議論を常日頃心がけ、率直かつ柔軟な精神の持ち主と衆人からも認められているような人でさえ、たとえば、議論の主題が自己の利害や偏見と密接に関わっていたり、精神的な外傷に触れるような場合、あるいは、論争に敗れ体面を失いそうな場合などには、ふだんの冷静さ、率直さを失い、知らず知らずのうちに不正な議論の方法に陥ることがあってまれではないのである。その意味で、ソフィストリーについて考えること、その、無限と思われるほど多様なヴァリエーションのうち代表的なものいくつかを知ることは、正真正銘のソフィストの餌食とならないためにも、また、無自覚的なソフィストリーから自己を解放するためにも、けっして無益なことではなかろう。それにまた、このことは、自己自身の意識野を拡大する、よりわかりやすいいえば、己れ自身をより深く、より適確に知ることにも役立つであろう。先にふれたごとく、人がソフィストリーに陥るのは、通常、議論が当人の弱み、ないし、盲点（無意識的な自尊心、劣等感、偏見、利害、願望、恐怖、不安など）に迫った時であるから、そのこと（ソフィストリーに陥ったこと）を手がかりにして、われわれは、逆に、自分自身の弱みや盲点がどこにあるかを知りうるのである。

さて、不正な議論の方法、すなわち、ソフィストリーは、これを、それに用いられる論証のあり方という視点から整理すると、二つのタイプのものに大別できるだろう。一つは、論理的虚偽の論証、いま一つは、無論理的虚偽の論証である。そのうち、前者についてはすでに詳しく論じたが、それは、要するに、前提から結論が論理必然的に帰結しない、それゆえ、妥当とはいえないような論証であった。それに対して、後者、すなわち、無論理的虚偽の論証とは、前提から結論がたしかに帰結する、それゆえ、論証そのものは妥当であるが、にもかかわらず、健全とは認めがたいような論証である。本稿で論じられるのは、この第二のタイプに属するような

論証，従ってまた，かかる論証を駆使するソフィストリーである。

- (5) 拙稿、『議論の発展のために（その１）——論理的虚偽について——』（帝塚山大学論集 32号 及び 33号，1981年，所収）

第二章 不 当 な 前 提

論理的虚偽の論証とは，論証の妥当性を決定する若干の論理学的規則に違反するような論証であった。従って，これらの規則に着目しさえすれば，それを分類し大系的に叙述することは比較的容易であった。ところが，これから論じようとする無論理的虚偽の論証は，かかる規則のどれ一つとして犯してはいない。だからこそ無（non）論理的虚偽と呼ばれるのであるが，論理的規則と無関係なだけに，それを分類し大系的に叙述することは，論理的虚偽の場合ほど簡単でない。事実，これまでにも，アリストテレス，ショーペンハウエル，ホワットリー，ベンサム，ミルら多くの哲学者，論理学者がこの無論理的虚偽に言及してはいるが，ほとんどの場合，各々の論者から見て代表的と思われるもの若干の列举にとどまっている。また，分類・叙述の方法にしても，各人各様，というのが実状である。今世紀に入ってから書かれたもの，たとえば，“Straight and Crooked Thinking”，“Thinking to Some Purpose”，“Fallacy：The Counterfeit of Argument”⁽⁶⁾ についても，同様である。本稿にしても，その点では，従来のものと変りない。あくまで，無論理的虚偽についての私なりの整理でしかないのである。

- (6) アリストテレス、『トピカ』及び『詭弁論駁論』（アリストテレス全集 2，岩波書店，1970年）

Arthur Schopenhauer, “The Art of Controversy” in “Essays from the Parerga and Paralipomena” (translated by T. Bailey Sauenders,

George Allen and Unwin Ltd., 1951)

Richard Whately, "Elements of Logic" (Longman, Green, Longman, Roberts, and Green, 1864, London)

Jeremy Bentham, "Political Fallacies" in "Bentham's handbook of political fallacies" (revised, edited, & with a preface by Harold A. Larrabee, The John Hopkins Press, Apollo Edition, 1971)

John S. Mill, "System of Logic" (Longmans, Green, and Co., London, 1884, People's Edition)

- (7) Robert H. Thouless, "Straight and Crooked Thinking" (Pan Books, London and Sydney, 1974, first published 1930 by Hodder and Stoughton Ltd.)

Susan L. Stebbing, "Thinking to Some Purpose" (Pelican Books, 1939)

W. Ward Fearnside & William B. Holther, "Fallacy: The Counterfeit of Argument" (Prentice-Hall, INC., Englewood Cliffs, N. J. 1959)

さて、論証とは、前提と結論という二つの部分から構成されるものであった。従って、論証が無論理的虚偽に陥っている、すなわち、前提から結論が帰結するにもかかわらず論証を健全とは認められないというのには、二つの場合があることになる。第一は、論証を構成する前提部分に問題がある場合、第二は、結論部分に問題がある場合である。本章では、まず、第一の場合について概観してみよう。

1 誤った前提

前提部分に問題がある場合の第一は、前提の一つ、ないし、両方が誤りである場合である。もし前提の一つ、ないし、両方が、その内容の点で誤りであれば、たとえ論証そのものが妥当であっても、健全な論証とはいえないだろう。

とはいえ、前提が誤りであることは、結論が誤りであるか否かの問題とは無関係である。前提が誤りであっても結論そのものは真理である、とい

う場合だって十分ありうる。論証が妥当である以上——そして、いまここで論じている無論理的虚偽の論証においては、論証それ自体は完全に妥当である——、正しい前提からは正しい結論以外のいかなるものも導き出されえないが、正しい結論は、正しい前提からと同様、誤った前提からもまた、導き出されうるからである。ちなみに、

(論証Ⅰ)

すべての動物は不死でない (no X is Y)

人間は動物である (all Z is X)

それゆえ、人間は不死でない (no Z is Y)

(論証Ⅱ)

すべての魚は不死でない (no X is Y)

人間は魚である (all Z is X)

それゆえ、人間は不死でない (no Z is Y)

という二つの論証を比較してみると、そのいずれにおいても、論証は妥当であり、かつ、結論は正しい。だが、正しい結論が、論証Ⅰにおいては正しい前提から、論証Ⅱにおいては誤った前提から導き出されているのである。従って、誤った前提を批判すること、このこと自体は当然かつ正当であるにしても、その批判を結論の真理性にまで敷衍すること、いいかえれば、前提を論駁したことによって結論をも葬り去ったかのようにふるまうことは、断じて許されない。かかる議論の方法は、誤った前提に基づく論証がそうであると同様、いや、それ以上に、不当な虚偽なのである。たとえば、ある人が「Aは、アメリカでの生活が長いから、英語を完全にマスターしているにちがいない。だから、彼を本学の英語教師として採用すべきだ」と論じたとしよう。それに対して、Aに反感をもち、別の人間Bを推す側が「アメリカでの生活が長いからといって、英語を完全にマスタ

ーしているとはかぎらないではないか」と批判するのは、むしろ、完全に正当である。実際、いくらアメリカに長く滞在していても、その間、少なからざる日本人居住者が事実そうであるように、狭い日本人社会の中だけで生活していたり、勉学は二の次にして旅行や皿洗いばかりしていたのでは、たいした英語力を期待できないからである。ところが、Aを排撃せんとするあまり、さらに一步を進めて、「誰もが簡単に海外に出られるようになった今日、アメリカで勉強してきたといっても、その中には、生意気なだけで英語の実力はからきしだめな、いいかげんなヒッピーまがいの人間がずいぶん多い。Aだってその一人かもしれない。危険な人事は避けた方が賢明というもの」などと論ずるのは、明らかに、行き過ぎである。Aが、事実、英語を完全にマスターし、英語教師として優秀かもしれないからである。

いうまでもないことだが、前提、より正確に言えば、前提部分を構成する命題が誤りになるのには、実に様々な場合がありえよう。命題が誤りに陥るのには具体的にいかなる場合がありうるか、誤りか否かをいかにして判別するか、これは、「議論」研究にとって、たしかに、中心的な問題の一つであろう。ただ、この問題は、それだけで一冊の書物になるほどの大問題である。それに、本稿は、無論理的虚偽の全体像を問題にし、それを整理・叙述することを目的にしている。それゆえ、この問題については、別の機会に詳しく論ずることとし、ここでは、命題が誤りとなる様々な場合の中から、人々がもっとも陥りやすいもの若干を選び出し、それらを列挙するにとどめたい。第一は、不当な一般化である。たとえば、「日本人の中に英語の上手な者などいない」、「最近の若者は誰一人礼儀をわきまえていない」などの命題が、それである。第二は、第一のものとも関連するが、実際以上あるいは以下に蓋然性を評価する過ちである。たとえば、あ

る事柄の真理である蓋然性が50%であるとすれば、「それが真理である可能性は非常に大きい」とか「真理である可能性はほとんどない」などというのは、誤りであろう。第三は、極度の単純化。「現代社会の不正、混乱の全責任はユダヤ人にある」とか「アメリカはこれまで常に侵略的、好戦的であったのに対し、ソ連は常に平和愛好的であった」などが、その例である。以上三つは、主として、定言命題に関するものである。他方、次の二つは、主として、条件命題に関するもの、すなわち、前件から必然的に後件が帰結しはしない誤りの条件命題に関連するものである。第四は、原因・結果の因果関係にない事柄をそうであるとみなす過ちである。それには、時間的に先行する事柄を後から生じた事柄の原因とみなす過ち（「神社に祈願したから大学に合格した」、「印鑑を更えたから事業に成功した」の類い）、唯一の原因といえないものを唯一の原因であるかのように断ずる過ち（「ヒトラーが政権を奪取しえたのは、ヴェルサイユ条約がドイツ国民にとってあまりに過酷だったからである」、「警職法反対運動が成功したのは、『デートもできない警職法』というスローガンが良かったからだ」など）、偶然的属性を原因と考える過ち（「彼が頭の良いのは、父親が東大出だからだ」、「彼は、小さい頃貧乏な家庭で育ったから、心がやさしい」など）、偶然的出来事ないし直接的契機を原因と混同する過ち（「マリー・アントワネットが冷酷で高慢だったため、フランス革命が勃発した」とか「オーストリアの皇太子が暗殺されたことが第一次世界大戦の原因である」の類い）など、があろう。第五は——論者の中にはこれを「分割の虚偽」、「構成の虚偽」の一種とみなす人もいるが——、全体とそれを構成する各部分の関係についての誤解である。たとえば、「今年度、市の予算総額が10%アップしたというのに、職員の給与が2%しかアップしないのは不当である」とか「個々の人間が自己の利益を誰からも妨害されることなく最

大限に追求することが許されるなら、社会全体の富は最大限に蓄積されるだろう」というような命題が、その例である。最後に、これは選言命題に関連する誤りだが、誤った選択肢の提示である。たとえば、「ヒトラーは独裁者であり、かつ、サディストである」あるいは「独裁者でもサディストでもない」が真理であるとするなら、「ヒトラーは独裁者であるかサディストであるか、そのいずれかである」という命題は誤りである。同様に、「武器をとって闘う」という選択肢を選ぶことが必ずしも不可能でないとするなら、「君は侵略者に対し服従するか国外に亡命するか、二つに一つを選ばねばならない」ということは、明らかに、誤りであろう。

2 立証を要する前提

次に、たとえ誤りではないにせよ自明とまではいえないような事柄、従って、議論を先へと進めるためには、まずもってそれを立証せねばならない当のその事柄が前提として立てられる場合にも、論証は健全とはいいたい。このような論証は、論理学者によって、「前提の不当仮定の虚偽」(fallacy of undue assumption of a premise)と呼ばれている。

とはいえ、誰の目にも明らかな、何人も疑いえないような事柄など、この世の中にそうそうあるものではない。実際、数学や物理学に関する議論ならともかく、言葉の真の意味で「議論」がもっとも必要とされるような領域、つまり、社会生活や政治生活などの領域においては、自明ならざる事柄の方がむしろ一般的なのである。それゆえ、自明ならざる事柄を前提として立てること、そのこと自体を虚偽というなら、およそ議論など成り立たなくなってしまうだろう。もとより、私としても、そのような極端なことをいっているのではない。自明ならざる事柄を自明の事実、あるいは、立証済みの事実であるかのごとくみなして、それを前提に立てるこ

と、これを虚偽であり不正である、といっているのである。

従って、たとえ自明ならざる事柄が前提として立てられていても、その前提の真理性を立証するような議論がつけ加えられていさえすれば、それを虚偽の論証とはいえない。この種の、自明ならざる前提をまず立て、それに基づき一定の結論を提示し、しかる後、前提の真理であること（あるいは、真理である蓋然性の大きいこと）を立証するような議論のスタイル——そのようなスタイルは、しばしば非常に大きな効果を生み出すので、頻繁に活用されるのだが——は、けっして、不正な議論の方法ではないのである。一例として、

もしソ連が日本にとって重大な脅威であるなら、日本は軍事力を整備
・増強すべきである

しかし、ソ連は事実日本にとって重大な脅威である

それゆえ、日本は軍事力を整備・増強すべきである

という論証を見てみよう。この論証の前提は必ずしも自明でない。事実、その一方あるいは両方の真理性に疑問を懐く人はけっして少なくあるまい。従って、もし前提が自明の事実とみなされ、それに関する何の補足説明も加えられないまま議論が先へと進められるなら、論証は健全なものとは認められない。だが、前提と結論が提示された後、それに引き続いて、なぜ、また、いかにソ連が日本にとって重大な脅威であるかに関する十分かつ説得力ある説明がなされ、さらに、そのような脅威に対処するには軍事力の整備・増強以外に道がないということが立証されるなら、それは、非常に説得力のある健全な議論といわねばならないだろう。

3 結論を先取りする前提

前提部分に問題がある場合の第三は、論理学者のいわゆる「論点窃取の

虚偽」(fallacy of question begging)である。この虚偽は、前提が不当であるという点では2の「前提の不当仮定の虚偽」と同様だが、不当性の内容においてそれとは異なる。2の虚偽においては、立証を要する命題が立証ずみのものとして前提に立てられる点が不当であったのに対し、3の虚偽においては、結論を先取りするような命題、換言すれば、表現はともかく意味のうえでは結論とほとんど同一の命題や、その真理性が結論に依存しているような命題(結論を真理と認めないかぎり真理とは認められないような命題)が、前提として立てられるという点、ここに不当性が存するのである。

実例を挙げながら、上に述べたことをさらに検討してみよう。たとえば、「キリスト教徒は、そうでない人間より善良な生活を送っているか否か」が問題になっているとしよう。その折、甲が「キリスト教徒であると世間の人々から認められ、また自らも自分を熱心なキリスト教徒であるとみなしている人の中にも、アルコール中毒患者や、家族をないがしろにする者、不正な金もうけを企む人が、少なからずいる。だから、キリスト教徒、必ずしも善良な生活を送っているとはいえない」と主張したのに対し、乙が「いや、そのような類いの人間は真のキリスト教徒ではない。その種の人間を私はキリスト教徒とは呼ばないのだ」と反論したとする。この反論は、はたして、正当であろうか。この点を解明するため、乙の主張を整理してみよう。

すべてのキリスト教徒は、アルコールにおぼれたり、家族をないがしろにしたり、不正な金もうけをしない人である (all Z is X)

アルコールにおぼれたり、家族をないがしろにしたり、不正な金もうけをしない人はすべて、善良な生活を送る人である (all X is Y)

それゆえ、すべてのキリスト教徒は、善良な生活を送る人である

(all Z is Y)

上の論証は、その形式に関するかぎり、完全に妥当である。それゆえ、論理的虚偽に陥っていない。だが、第一の前提は結論とほとんど同義である。あるいは、結論「すべてのキリスト教徒は善良な生活を送っている」を認めないかぎり、「すべてのキリスト教徒はアルコールにおぼれたり……しない人である」を承認することはできない。従って、乙の論証の第一の前提は結論に依存している。「キリスト教徒」に関する乙の定義そのものが、すでにして結論を先取りしているのである（論点窃取の定義）。

さらに、情緒的（色彩の強い）用語もまた、論点窃取の虚偽の一種とみなすことができよう。たとえば、有罪か無罪かを審議すべき法廷の場において、被告を「この悪漢は……」とか「このような冷酷かつ残虐な罪を犯した被告は……」と悪罵するのは、明らかに、論点窃取となろう。犯罪を犯したかどうか、悪漢かどうかこそが、当面の論点となっているからである。同様に、民主社会党の政策が労働者の利益に合致するか否かが問題になっているとすれば、「穏健な改良主義政党、民主社会党は……」というのも、「自由民主党の補完政党、民主社会党は……」というのも、論点を窃取していよう。前者は、明らかに、「合致している」という結論を、後者は「合致していない」という結論を、各々、すでにして示唆しているからである。

4 循環論法

前提に問題がある場合の最後に、循環論法といわれるものについて簡単にふれておこう。これは、3の「結論を先取りする前提」の一種と考えてむろんさしつかえないのであるが、前提の真理性が結論に、かつ、結論の真理性が前提に依存しているような論証である。

理解を容易にするため、陳腐な例を一つ挙げておこう。三人組の強盗、甲・乙・丙が金貨10枚を盗み、それをいままきに分配しようとしている。その時、甲がこう提案する：「3枚はお前乙が、次の3枚はお前丙がとり、残り4枚は俺がいただくことにしよう」。それに対して乙・丙は、当然のことながら、「どうしてお前だけが4枚とるのか」と抗議しよう。それに答えて甲：「それは俺が首領だからだ」。乙・丙がいう：「お前を首領と決めた覚えなどない。いかなる根拠に基づいて、お前は、自分を首領だというのか」。甲答えて、「それは、三人の中で俺が一番沢山金貨をもつからだ」。甲の論証は、整理すれば、

もし私が首領なら、金貨を4枚とることは当然である

しかし、私は、事実、首領である

それゆえ、私が金貨を4枚とるのは当然である

となる。この論証は、その形式に関するかぎり、条件命題の前件を肯定することによって後件を肯定する妥当な論証である。ところが、第二の前提（私は首領である）は必ずしも自明の事実ではない。だからこそ、乙・丙もその点を問題にする。それに対して、甲は、その前提を正当化する根拠に結論をもち出している。従って、前提の真理性が結論に依存している。しかも、結論によって正当化したこの前提に基づき、結論を正当化している。従って、結論の真理性が前提に依存している。それゆえ、甲の論証は循環論法に陥っているといわざるをえないのである。同様に、

甲：あいつは傷害の前科があるから粗暴な人間にちがいない。

乙：しかし、私の知るかぎりでは、あの人はとても善良で心やさしい人のように思えるのですが。

甲：いや、そんなことはない。君の前では、あいつは猫をかぶっているだけだ。だって、あいつが、君のというような善良で心やさしい

人間なら、傷害事件など起こすはずがないじゃないか。

という会話の中での甲の議論（傷害事件を起こしたから粗暴な人間にちがいない。粗暴な人間だから傷害事件を起こした）も、循環論法であることが理解できるだろう。

5 不当な前提の隠蔽

以上、前提に問題があるがゆえに健全とは認めがたい論証四種類（あるいは、4の「循環論法」は3の「結論を先取りする前提」の一種とみなしてもさしつかえないのだから、三種類）を概観した。次に、われわれは、前提に問題があるということをソフィストがいかにか隠蔽するかについて考えてみよう。もとより、ソフィストは、隠蔽のためとあらば、ありとあらゆる手段に訴えるだろう。その意味では、次章及び第四章で論じられる様々なソフィストリーも、この、前提に問題があるということを隠蔽するのに役立つこと、いうまでもない。しかし、叙述の都合上、ここでは、隠蔽のための方法のうち特に頻繁に用いられるもので、しかも、以下の二つの章で論じられるものを除外した五つのものだけを列挙しておこう。

前提に問題がある、すなわち、誤った命題や立証を要する命題、あるいは、結論を先取りするような命題が前提に立てられているという事実を隠蔽するための第一の方法は、曖昧な表現を多用することである。「一般には」、「概して」などの用語、不確定命題（命題が全称であるのか特称であるのか、その表現形態だけからでは判断できないような命題）が、それである。第二は、まわりくどい表現（たとえば、「自信はないのですが、いまのところ私には、おそらく～であるとは思えないのですが……」とか「私の錯覚かもしれませんが、もしそうしたらお許し下さい、たしか～は～だったと思うのですが……」など）を駆使することによって、

いざという時の逃げ道を用意しておくこと。第三に、議論をいたずらに長くしたり、機関銃のような速さでまくしたてること。第四に、相手を威圧するような大きく張りのある声で自信たっぷりに所説を展開すること。そして最後に、問題があるのではないかと思われる（疑わしい）前提を、はのめかすだけにとどめたり、あるいは、故意に省略すること。

第三章 無関係な結論 I (狭義における *ignoratio elenchi*)

前章でわれわれは、妥当ではあるが健全とは認めがたい論証のうち、前提部分に問題がある場合を検討した。続いて本章及び次章では、論証の結論部分に問題がある場合を考察してみよう。まず、「結論部分に問題がある」、これは、具体的には、いったいいかなる場合を指すのであろうか。結論からいえば、それは、論証の結果導き出される結論が当面の論点からかけはなれている、あるいは、無関係である場合以外にありえない。なぜといって、論証が妥当で（何度もうのように、本稿で論じている無論理的虚偽の論証においては、論証そのものは完全に妥当である）、しかも、前提部分に問題がない（真理である）とすれば、そこから導き出される結論は真理であらざるをえない；そして、論証が妥当であり前提も結論もともに真理でありながら、しかも健全とは認められないような論証がもしあるとすれば、それは、上で述べた、結論が当面の論点から逸脱しているような論証の他にはいかなるものも考えられないからである。たとえば、「天皇は現人神か否か」（真理性に関する問題）が論点となっている時、民衆の天皇崇拝が国体の護持にどれほど役立っているか（有用性に関する問題）を力説することは、たとえ論証が妥当で前提と結論がともに真理であっても、論点を逸脱した不健全な議論といわざるをえない。また、「最低

生活さえ維持できない極貧層に対し政府はどの程度の援助をするのが適当か」が論点である時、「人はパンのみにて生くるにあらず」と論じたり、「少年の非行化を防止するため教師はいかなる役割を果すべきか」が問題となっている時、「非行の原因は 両親の無理解や暗い家庭の 雰囲気にあるのだから、両親がもっと反省し子供の養育に責任をもたねばならない」とか「政府自民党が押しつけている受験本位の教育システム（あるいは、資本主義体制）が続くかぎり非行はなくなるらない」などと論ずるのも、同様であろう。このように、論証の結果導き出される結論が当面の論点と無関係な場合、それは、「論点相違の虚偽」(ignoratio elenchi, fallacy of irrelevant conclusion) と呼ばれる。

ただ、論点相違の虚偽という場合、その中には、ふつう、論点の歪曲や論点の変更というそれ本来の意味における「論点の相違」だけでなく（ちなみに、上に挙げた例は、いずれも、本来の意味における論点の相違である）、「心理的操作」、「議論の打ち切り」、「擬似論理的言辞の駆使」と私が命名するところの、議論を有利にすすめたり、劣勢を糊塗するための数々の不正なテクニックまでもが含まれている。本稿でも、その慣例に従うことにする。それというのも、本来の意味における論点の相違と、敷衍された意味におけるそれとは、実際には、重複するところがきわめて多く、厳密に 区別するのがほとんど不可能だからである。とはいえ、この区別は、叙述をすすめるうえで、必ずしも無意味とも思われえないし、便利でもある。それゆえ、本稿では、論点相違の虚偽を狭義におけるそれと広義におけるそれとに分ち、それらを順次論ずることとする。まず本章では、前者の、狭義における論点相違の虚偽を問題としよう。

1 論点の歪曲

狭義における論点相違の第一は、論点の歪曲である。これには、いくつかのタイプがあるが、ここでは、そのうち代表的なものの三つのみを紹介することにする。まず第一は、相手の主張を故意にゆがめ（拡張、単純化）、それを論駁することによって相手の主張そのものを論駁し去ったかのようにふるまう不正である。たとえば、相手が「日本は工業原料のほとんどを海外からの輸入に依存しているのだから、輸送路の安全確保のため、海軍力の整備、増強にもっと金を出すべきだ」と主張した時、「軍事費を今以上に増大することは、必ずや、福祉の後退を生むだろう」などと反論するのは、明らかに、論点の歪曲となろう。また、「現行憲法が存続する以上、軍事力の大幅な増強は許されない」と相手が主張している時、それを「軍事力の大幅な増強は断じて許されない」と単純化し、「君は、今日の激動する世界情勢のことが少しもわかっていないから、そんな呑気なことをいえるのだ」と批判したり、「中・高の英語教師の中で、英語をまともに話せる人間はごくわずかしかない」（特称命題）という相手の主張を「中・高の英語教師には英語をまともに話せる人間など一人もない」（全称命題）とゆがめ、そのうえで、「いや、君の主張は誤っている。現に、わが校の英語教師には、英語の話せる者が何人もいる」などと論ずるのも、同様であろう。

第二に、これは第一のものとも密接に関連するが、相手が自説を拡張ないし単純化するよう意図的に工作し、かくして拡張、単純化された相手の主張を反駁する不正である。感情を完全にコントロールできる人間は、この世の中に、そう多くはいない。ほとんどの人間は、興奮したり苛立つと、ふだんの冷静な判断力を失いがちである。その結果、より大胆で単純な主張を展開することになる。しかし、大胆で単純な主張は、慎重に、そして様々な条件をつけて述べられた主張に比べ、それを反駁するのがはる

かに容易である。だからこそ、ソフィストは、侮蔑的な言辞を弄したり、相手の言葉尻をとらえたり、相手の主張を故意にゆがめるなど、ありとあらゆる手段を使って、相手を立腹させ苛立たせようとする。そして、腹立ちまぎれに述べられた相手の大胆で単純な見解を、得意気に反駁するのである。一例を挙げると、「日本の自由民主主義的政治体制には、政治家の腐敗・墮落、官僚主導の政治体質、国民の政治的無関心など、早急に改善されるべき深刻な問題が山積しているが、それでも、ナチス支配のドイツの政治体制やソ連の全体主義的政治体制と比べると、はるかに優れている」という意見の持ち主も、日本の政治体制の欠陥ばかりを強調され、「良いところなど一つもない、史上最悪の政治体制だ」とか「君は度し難い反動的思想の持ち主だ」などと罵倒されると、心穏やかでなくなり、興奮のあまり、ついには、「日本の政治体制には 悪いところなど一つもない。あったとしても、とるに足りないものばかりだ。日本の政治体制は世界に類を見ないほど優れている」などと口をすべらせてしまうのである。類似の悲劇を、われわれは、日本近代史の中にも見出すことができよう。明治維新以降、日本知識人の多くは、近代化への情熱に駆られて、ことあるごとに、「日本は遅れている。日本人には近代的自我がない……」と指摘してきた。彼らの指摘には、むろん、傾聴すべき点がけって少なくない。とはいえ、日本と日本人についての遅れた面、好ましくない面ばかりがことさら強調されたため、一部知識人の間に、「彼ら 西洋かぶれは、日本社会と日本民族の美点いっさいを無視している」という、ある意味で正当な反抗が生じた。そして、彼らの主張は、国民大衆の圧倒的な支持をうける中で、いつしか、「日本社会と日本民族は比類なきものである」とまで高められ、かくして、日本は、自己陶醉的「大東亜共栄圏」へとつきすすんでいったのである。さらにいえば、日本人の中の少なからざる者が、いま

だに、かかる両極端の自己評価からぬけきれないでいる。あるいは、その間で揺れ動いている。だからこそ、土居健郎の『甘えの構造』を読んで深く感動し、「日本人の甘え」を反省したはずの者が、“Japan as No. 1”が出版されると、すっかり有頂点になり、「いまや、日本（人）の優秀さが世界的に認められるようになった。われわれは、なにも、自己卑下する要などないのだ」という自画自賛に陥るのである。

論点歪曲の第三は、極端なコントラストやある一点のみを強調することによって、論点の真の姿をゆがめるトリックである。灰色は、黒の隣に置かれれば白のように、その反対に、白と並べられると黒のように見える。それと同様、ある事柄は、極端な例と対比されたり、ある一面のみがことさら強調されると、実際以上に真理、あるいは、誤謬であるかのように印象づけられるのである。たとえば、「トヨタカローラは、総合的に見て、どの程度優れているか」が論点となっている時、ベンツやロールスロイスなどの超高級車の例が出されると、いかにも貧相に見えて、欠点ばかりが目立つ。だが、故障ばかり繰り返し燃費も悪いオーストラリア・ホールデン車と比較されると、世界最高の車であるかのように思えてくる。同様に、「日本は軍事予算をどの程度増額すべきか」が論点となっている時、少なくとも倍増すべきであるという意見の持ち主は、帝国軍隊当時の日本、あるいは、アメリカやソ連などの超軍事大国の例をもち出すことによって、自説を実際以上に控え目で筋の通ったものであるかのように印象づけることができる。その逆に、軍事予算をむしろ減額すべきと考える論者は、東南アジア諸国の指導者が日本の軍事力に対しすでにして脅威を感じているという一点のみを強調することによって、自説に実際以上の信憑性を与えることができるのである。

2 論点の変更

狭義における論点相違の第二は、論点の変更である。われわれは、議論が自分にとって不利な時、自分の誤りを素直に認め、自説を潔く撤回することができるだろうか。それだけの勇気と度量をもっているだろうか。むしろ、敗北を認め自尊心をいたく傷つけられる位なら死んだ方がまし、という人の方がはるかに多いのではあるまいか。そうした人が体面を保つために訴える方法の中で、もっとも一般的なのは、論点を変更する（論点をそらす）ことである。以下、そのいくつかを列挙しよう。

第一は、「ところで」、「そういえば」、「君の話を聞いていてこんなことを思い出した」、「今問題になっていることとは直接関係しないかもしれないが」などという前置きをした後、それに続いて、当面の論点とまったく無関係な事柄や、当面の論点からいくぶんずれた事柄について論ずることである。この方法は、ふつう想像される以上に効果的である。現に、われわれは、この方法によって、しばしば、窮地を脱する。それというのも、論点の変更に気づかない、あるいは、たとえ気づいてもそれを口に出す勇気をもたなかったり、そのタイミングを見い出せない人がけっして少なくないからである。また、相手が、実際に口に出して、「問題をそらすとは卑怯だ」と非難するなら、その時はその時で、「君のいう通りかもしれない。だが、今僕が提起した問題の方がはるかに重要だ。とるに足りない問題をいつまでも議論するのは時間の無駄」と、居直ることもできよう。

第二は、問題の本質とは無関係な、ささいな点をしつこく問題にし、その点で相手を問いつめ、そのことによって、当面の論点がどこにあるかを曖昧にしてしまう不正である。ある事柄を立証し、その真理性を相手に説得しようとする時、われわれは、それを裏づけるような実例を出来るだけ多く紹介し、また、用語を出来るかぎり厳密に使用しようとする。相手が

偏見にこり固まった頑迷な人間であったり、わずかなミスをも見逃さない鋭敏な知性の持ち主であったりする時には、尚更である。だが、第一級の哲学者や論理学者ならいざしらず、通常の知性の持ち主たるわれわれが、実例をより多く、用語をより厳密に使用ないし定義しようと努めれば努めるほど、「隙」が大きくなる。不適切な例や用語の一つや二つは、どうしても避けられないのである。もとより、例や用語が適切か否かは、それがまさしく問題になっているのであればともかく、単に、ある事柄を立証するために引き合いに出されているにすぎないとすれば、当面の論点にとっては非本質的な事柄でしかない。しかるに、ソフィストは、この、ささいな点での隙をつく。そして、そのことによって、論点を曖昧にするのみか、敗色濃厚だった形勢を一気に逆転させようとするのである。

論点変更の第三は、カモフラージュとしての対人攻撃である。それには、次のようなものがある。(1)議論が不利な時、たとえば、「君は相手を徹底的に打ち負かすまで議論を止めない。そういう、しつこくて、陰険な君を見ていると、へどが出る。そんな性格だから君は他の者にも相手にされないし、出世も出来ないのだ」などと、相手の性格に攻撃の矢を向け、そのことによって論点をそらしてしまうソフィスト。(2)「君が今言っていること自体は正しいかもしれないが、それは君の思想信条と相入れないのではないか」とか「君はつい先日こんなことを言っていた。それと、今君が言っていることとは、いったい、どう結びつくのかね」などと相手の矛盾をついたり、「東京は、いろいろな角度から考えて、非常に住みづらい都市である」と論ずる者に対し、「そんなに東京が嫌なら、なぜ他の所へ引っ越さないのか」と相手の言行不一致（実際には、必ずしも、そうとはいえないのだが）を詰ることによって論点を変更するソフィスト。参考のため附言すれば、この種の議論は、「人に訴える論証」(argu-

mentum ad hominem) と伝統的に呼ばれてきたものと、おおむね、一致するであろう。

第四は、ユーモアや皮肉による論点の変更である。もとより、ユーモアや皮肉、それ自体は不正ではない。ユーモアや皮肉は、時に、議論に生彩を与える。堅苦しい雰囲気のうちとけたものに、湿りがちな議論を活発なものに転換するうえで、大きな役割を果しうるのである。だが、どんな有益な事柄にも、一定の限度とタイミングというものがあろう。その限度をふみはずしタイミングを誤ると、有益な事柄も有害なものに転化する。ユーモアや皮肉にしても、節度をわきまえず連発されたり、不適切な瞬間に使用されると、それは、論点の変更を結果する不正な議論の方法になるのである。この方法は、一対一の議論の場においてよりも、むしろ、集団討議や、聴衆を前にした公開討論、ブラウン管の前の視聴者を念頭に置いたテレビ座談会等の場において頻繁に活用される。たとえば、ある論者が深刻でこみいった、それゆえ、それを理解するには最大限の注意力集中が要求されるような議論を展開している時、横合から、茶化すような言辞や一同を爆笑の渦にひきこむような冗談が発せられると、当の論者は、先の真面目な議論に立ち帰りにくくなってしまう。当の論点にあくまで固執することがピエロのように滑稽な役割を演ずる結果になるような、そういう気持ちにさせられるのである。論者がそうとすれば、聴衆は尚更であろう。聴衆は、大笑いしたことで、緊張感を失ってしまう。大笑いした後、もう一度、先のこみいった議論に耳を傾けることは、聴衆にとって、容易ではないのである。Fearnside と Holther の書物から、この点に関する興味深い一例を紹介しよう。かつて、ダーウィンの『種の起源』をめぐる公開討論が催されたことがあった。その折、トーマス・ハクスレーの真面目な学術的議論に続いて演壇に立った大司教・ウィルバーフォースは、ひとし

きり、科学的には無内容であるが弁舌巧みなダーウィン批判を行なった後、論敵・ハクスレーの方をふりむき、次のように語った、ということである。“Was it through his (Huxley) grandfather or his grandmother that he claimed his descent from a monkey?” 聴衆が笑いこぼれたこと、想像に難くない。また、ダーウィン説を支持する者にしても、かかる低劣な冗談に対しては、真面目に反論する気にさえなれなかったことであろう。かくして、学術的議論は台無しとなり、聴衆は、ダーウィンの説についてほとんど啓蒙されることもなく、ただ、なんとなく愉快的気分だけを家にもち帰ったことであろう。だが、幸いなことに、ハクスレーはあえてピエロの役を買ってでた。その折のハクスレーの発言は、ユーモアや皮肉の乱用を戒めるまことにきびしい内容のものであった。傾聴すべき点が少なくないと思われるので、ここに、その要旨を紹介する。「われわれ人間は、自分の祖父が猿であることを恥じる必要など毛頭ない。思い出すのさえおぞましい祖先がもしあるとすれば、それは、人間である。すなわち、自分自身の領域での成功だけでは満足せず、それに関してはなんら真の知識というだけのものももたない科学の問題にまで首をつっこみ、レトリックを駆使することにより問題をぼかし、枝葉末節の事柄を言葉巧みに述べたて、人々の宗教的偏見に訴えることによって真の論点から聴衆の注意をそらす、そういう人間を祖先にもつことこそが最大の恥なのである」⁽⁸⁾

(8) Fearnside & Holther, *ibid.*, p. 123.

論点変更の最後に、「問題のすりかえ」について簡単にふれておこう。たとえば、「ソ連のアフガニスタン侵略は断じて許されるべきでない」という非難に対し、「アメリカだって、ベトナムで同じことをしたではないか。だから、ソ連を非難するのは間違っている」と反論するのは、明らかに、問題のすりかえである。もしアメリカも同様に侵略行為をしたという

のであれば、それは、アメリカを非難する理由にこそなれ、ソ連を免罪する理由にはならないのである。また、空巢の罪で徴役刑を言い渡された者が「世の中にはもっと悪い奴がいくらもいる。そういう奴らがのうのうと暮しているのに、たいした罪も犯していないこの俺が刑務所入りとは、どう考えても不当だ」と言い張ったり、厳正たるべき卒業判定会議の場で、「あの子は、たしかに成績は良くないが、すでに一部上場企業への就職も決っているのだから、なんとか卒業させてやれないか」などと、教授会構成員の感傷に訴えるのも、問題のすりかえであろう。

第四章 無関係な結論 II

(広義における *ignoratio elenchi*)

1 心理的操作

広義における論点相違の最初に、「心理的操作」について検討してみよう。この項目には、理性ではなく感情や利害等に訴えることによって議論を有利に進めようとする様々なテクニックがすべて含まれよう。もとより、感情や利害等に訴えること、それ自体は、必ずしも、不正な議論の方法ではない。感情や利害等に訴えることが不適切である時に（たとえば、そうすることが、議論の経過から考えて、論点の歪曲や変更にならざるをえないような時）そうすること、また、誤りの命題や不確かな命題を感情や利害等に訴えることによってもっともらしく思わせること、これが不正なのである。以下、上述した意味で不正な議論の方法のうち、もっとも頻繁に援用されるもののみを列挙しよう。

(1) 権威に訴える議論

権威を引き合いに出すこと、このことは、ある場合には、正当であるのみか、必要不可欠でもあろう。だが、権威からの引用は、議論を有利に進

めたり聴衆を説得するうえできわめて効果的であるので（時には、百の議論よりはるかに効果的である）、しばしば、悪用ないし誤用される。理性的議論を補完したり、事実認識のうえで信頼性の高い情報を提供するといった、それ本来の役割においてではなく、理性的議論にとってかわるものとして、あるいは、不確かな主張や情報にもっともらしさを加える「刺身の莖」として、用いられるのである。

第一に、自説の信憑性を増大させるため、引用された当の権威者が実際には述べてもいないことを当の権威者の証言として引用すること（たとえば、レーニンの著作など一行も読んだことがないのに、レーニンなら書いていそうなことだと憶測し、「レーニンも述べているごとく」と言うこと）、これは、まぎれもなく権威の悪用であろう。第二に、権威者の発言を不当にゆがめ（すなわち、自分の都合の良いように拡張したり単純化したりして、あるいは、その発言がなされた背景や全体の文脈を無視しその部分のみを故意に孤立させて）引用すること。第三に、不適切な権威の使用、具体的には、歴史的あるいは地理的に根本的に異質な社会的、文化的背景の下で活躍していたり現に活躍している権威的人物の発言を、背景の相違をまったく考慮に入れることなく無限定的に、「現代の問題」や「ある地域における問題」に対する権威的見解として引用すること、また、たとえある分野の権威者であれ、当面問題になっている事柄に関しては素人と五十歩百歩の人物の見解を、それに関する権威的発言として引用すること（たとえば、ノーベル賞を授与された数学者がたまたま、あるいは、一人の市民として、教育や世界平和について語ったにすぎない発言を、その分野に関する権威的発言として引用すること）。第四に、特定の権威者を明示することなく、あるいは、若干の権威者の名前を挙げることによって、ほとんどすべての専門家が自説を支持しているかのごとくふるまうこと（たとえ

ば、「政府の金融政策は是か非か」が論点となっている時、「世界的経済学者のA教授やB教授が政府の金融政策を支持していることから明らかなように……」とか「一流の経済学者の多くが政府の金融政策に反対しているのだから……」ということのみを自説の真理性の根拠とすること)。以上はすべて、権威の悪用ないし誤用となろう。また、相手に理解できそうもない難解な言葉や専門用語をやたらに用いることも、権威の悪用の一種とみなしうるであろう。

(2) 伝統に訴える議論

たとえば、「明日から長期ストライキに入ることが待遇改善のため有効か否か」が問題となっている労働組合の会議での席上、老闆士が「わが組合は、戦前、軍国主義的政府に対し、数多くの犠牲者を出しながらも、果敢に闘い、戦後も、占領軍、政府自民党、第二組合等の不当な干渉をはねのけ、横暴な経営者と断固闘ってきた。かかる光栄ある伝統をもつわが組合が長期ストライキに入るのは、当然であるのみか、われわれの先輩達に対する義務である」などと論ずるのは、論点相違であることはいうに及ばず、伝統の悪用でもあろう。なぜといって、「これまで常に戦闘的な組合であった」ということは、組合員の誇りにこそなれ、「明日からの長期ストライキ戦術」を正当化する根拠にはとうていなりえないからである。同様に、ゲーテ、カント、ベートーヴェンなどドイツのすぐれた文化的伝統に言及することは、ドイツ人を深く感動させることにはなろうが、そこから転じて、「世界に冠たるドイツ民族」と論じたり、「スラブ民族の劣等性」、「ユダヤ人の邪悪性」に批判の矛先を向けたりすることは、断じて許されないだろう。

(3) 偏見に訴える議論

たいていの人には、なんらかの偏見、つまり、根拠のない意見や信念をも

っている。しかし、根拠が無いからといって、それは、偏見が脆弱なものであることを意味しない。むしろ、無根拠である、すなわち、知的吟味や理性的反省を経ていない、あるいは、寄せつけないものであるからこそ、それは、途方もなく巨大な非合理的エネルギーを秘めている。だからこそ、ソフィストは、人々の偏見に訴える。そして、そのことによって、議論を有利に進めようとするのである。偏見に訴える議論は、枚挙にいとまがない。そして、そのいくつかについては、社会心理学、政治学等の領域ですでに詳しく論じられている。それゆえ、一々例を挙げるまでもあるまい。また、先にふれた「権威に対する尊敬心」や「伝統に対する愛着」にしても、それ自体は、必ずしも、偏見でない。というより、社会生活を送る人間にとっては、不可欠の美德ですらある。実際、（正当な）権威が権威と認められないならば知的、社会的混乱は避け難いだろうし、伝統に対する愛着があればこそ社会も、それを構成する諸個人もアイデンティティを維持し、急激な変動（と、それに伴う空白状態）の発生を必要最小限に抑制しうるのである。とはいえ、かかる美德も、容易に、偏見に転落しうる。そして、そうなったが最後、ソフィストの恰好な攻撃目標に転化しよう。

(4) 疑惑に訴える（疑惑をひきおこす）議論

「偏見に訴える議論」の一種とみなしうるものに、「疑惑に訴える（疑惑をひきおこす）議論」がある。ある事柄が真理か否かの問題を、それを主張する個人がいかなる人間かという問題から切り離して考えることのできない人は、結構、多い。この点につけているのが、一方では、「権威を悪用する議論」（権威者が言うのだから、正しい）及び「賞賛に訴える議論」（あの人は良い人だから、あの人の言っていることは間違っていない）であり、他方では、「疑惑に訴える（疑惑をひきおこす）議論」（怪しげ

な人物が言うのだから、誤りにきまっている)である。一例を挙げれば、少なからざる人々は、家庭生活に失敗した者は「結婚問題」や「家庭問題」について発言する資格はない、たとえその資格は認めるにしても、そのような者の意見は誤りにきまっている、と思いこんでいる。その種の「偏見」を懐いている。だが、事実は、必ずしも、そうではない。家庭生活に失敗した人が、むしろそうであるからこそ、その反省の上に立ち、より良い「結婚論」や「家庭論」を展開することが、けっして、まれではないのである。従って、「ルソーの教育論の現代的意義」が論点となっている時、「ルソーといえば、女中に次々と子供を生まれ、生まれてきた子をことごとく、無責任にも、孤児院へ送ったというではないか。そんないいかげんな人間の教育論がまともであらうはずがない」と論じたり、刑務所の看守と囚人達の間でトラブルが生じた時(1980年、オーストラリアはシドニーの郊外、パラマッタの刑務所に服役する囚人達が、看守の度重なる暴力行為をNSW州政府に訴え、訴えをうけた州政府は、事実調査の末、二名の看守を告訴した。だが、囚人達の訴えを事実無根と主張する看守の労働組合は、政府抗議のストライキに突入、怒った囚人達が暴動を起こすという事件があった)、「囚人達の言うことと、看守の組合の言うこととのどちらが真実か、火を見るより明らかである。州政府は告訴決定を撤回せよ」(事実、この種の投書が連日新聞紙面を賑した)と主張することは、どう考えても、不当であろう。さらに、「火の無いところに煙は立たない」式の議論も、この「疑惑に訴える(疑惑をひきおこす)議論」とみなすことができよう。二つほど例を挙げれば、それは、「A教授は、教え子のB子さんから、猥褻行為を強要されたとして訴えられたそうだ。それが事実かどうかはこの私には知る由もないが、訴えられるほどだから、A教授は品性卑しい人間にちがいない」とか、「あの政治家には、と

かく金に戦いといううわさがある。もちろん、うわさはあくまでうわさにしかならないが、そういううわさをたてられるからには、少なくとも、清廉潔白な人物ではあるまい」というがごとき議論のことである。

(5) 大勢順応的メンタリティーに訴える議論（プロパガンダ研究者のいわゆる “Get on the Band Wagon”）

「皆さんそうおっしゃいますが」とか「最近の風潮といたしましては、一般に」、「一握りの過激派連中は別として、善良な市民生活を送る人なら、きっと私の考えに賛成して下さると思いますが」、「額に汗して働く労働者の方々には、いまさら説明するまでもないと思いますが」などといった前置きに続いて、一定の考えが述べられる場合、その考えにあえて異論を唱えることは、たとえ不可能でないにせよ、非常に難しい。そうすることが、自分を変人、一部少数者であることを認める結果になるような、そういう気持ちにさせられるからである。少数の異端者であるよりは多数派の一員である方が、むしろ、気楽である。ソフィストは、かかるメンタリティーにつけいる。少数意見が真理により近いという場合は歴史上まれではないのだが、ソフィストは、多数意見であるということを真理であることの必要にして十分な条件と考える。だからこそ、自説が少数意見である場合でも、それを、あたかも多数意見であるかのごとく提示するのである。また、「大勢順応的メンタリティーに訴える議論」に類似のものとして、「今日ここに御集りの皆さんは、皆さん知的で教養豊かな方ばかりですから、このようなことは先刻御承知のことと思いますが」とか「このような立派な方々を前にして愚見を披露させていただくことは、私にとってまことに光栄なのですが」などといった「おべっか」の前置きをした後、自説を展開する議論があらう。

(6) 中庸を好む（あるいは、嫌う）メンタリティーに訴える議論

極端なものの考え方を嫌う人は多い。多くの人は、自説をバランスのとれたものであると思いたい。このようなメンタリティーにソフィストはつけない、両極端を排したバランスのとれたものとして自説の真理性を主張したり、他者の見解を極論であるという理由からその真理性を排撃しようとする。そして、この種の議論の方法は想像以上に効果的なのである。しかし、当然のことながら、中道であるがゆえに真理、極論であるがゆえに誤謬、などとは断じていえない。なぜとって、ほとんどのいかなる見解も、両極のとり方次第で、自己を中道であると主張しうるからである。ちなみに、民社党は自党を極右（自民党）と極左（共産党）の中道であると、社会党は自民・民社・公明等の右寄り路線と共産党の極左路線の中道であると、共産党ですら自党を反共連合勢力と極左冒険主義的諸セクトの中道であると主張しうるであろう。その一方で、世の中には、中庸であることを毛嫌ひする向きもないわけではない。わけでも、青年、学生層に、そういう人が多い。そういう人の目には、中庸なるものは中途半端で不純なものと映ずるのである。従って、この種の人々に対する時、ソフィストは、ことさらに悲憤感を漂わせ、自説を「あまりに赤裸々な真理であるがゆえに多数者の支持を得られない、それゆえ、それを真理と認めるには相当の勇気が要求されるようなもの」として提示し、他者の見解を「どっちつかずの不徹底で妥協的なもの」として批判するのである。

(7) 答の誘導

相手がすこぶる知的で説得されることに強烈な嫌悪感を懐いているような人間である場合や、なにごとによらず反対しないではいけない「へそまがり」である時、期待する答と反対の答を要求しているかのようにふるまったり、自分の本心とは相反するような見解を自説として主張することは、それなりに効果的であろう。とはいえ、この方法も、度を過すと、ソ

フィストリーとなること、いうまでもない。

2 議論の打ち切り

広義における論点相違の第二は、「議論の打ち切り」である。これは、議論の方法ということさえ憚られるような代物である。議論が不利な時には、自説を謙虚に反省し、相手が正しければそれを潔く認める態度、このような態度こそ、われわれには切に望まれる。しかるに、われわれは、しばしば、故意に議論を打ち切る。そして、そのことによって、論点そのものを霧散解消させ、かろうじて体面を保つのである。そのような意味で、われわれは、この「議論の打ち切り」を、広義における論点相違、不正な議論の方法の一種とみなしてもさしつかえあるまい。それには、以下のごときものがあろう。

(1) レッテルはり (name calling)

「それは～ism だ!」、「そのようなことを言うとは、君は非国民だ!」、「反動的だ!」、「反革命的だ!」、「神に対する冒瀆だ!」、「人の道に反する!」などと、相手の議論にレッテルをはること、そしてそのことによって、相手の議論を一蹴したかのようにふるまうことは、明らかに不正である。もっとも、この種のレッテルはり、厳密に言えば、必ずしも、議論の打ち切りではない。これを「論点の歪曲」(論点の単純化)あるいは「心理的操作」の項目に分類することも、むしろ可能であろう。ただ、レッテルはり、多くの場合、議論を打ち切る効果をもつ。レッテルをはられた当人は、怒り狂うか、さもなくば、「このような単純で卑劣な人間と議論しても無駄だ」と考え、議論そのものから撤退してしまうからである。そしてまた、現実には、そのような効果を狙って使用されることが多い。そのような趣旨で、私は、「レッテルはり」を「議論の打ち切り」の項目に分

類したのである。

(2) 脅迫

「そのようなことを言うのは君のためにならない」、「そのような考えをもつ人間はこの会社（あるいは、組合、党など）にいてもらう必要はない」、「私の考えに賛成してもらわないと困る」などという脅迫的言辞を弄することも、不正な議論の方法であろう。「脅迫」は、「論点の歪曲」ないし「心理的操作」でもあるが、「レッテルはり」の場合と同様な理由で、「議論の打ち切り」の項目に分類した。以上二つは間接的な「議論の打ち切り」であったのに対し、以下のものは直接的な（赤裸々な）「議論の打ち切り」である。これらについては、ただ項目を挙げるだけで説明の必要はないだろう。

(3) 暴力による議論の打ち切り（暴行を働く）

(4) 「時間がないから、また今度にしよう」、「急用を思い出した」（実際には、時間が十分ある時）

(5) 「くだらないことで言い争うのはやめにしよう」

(6) 「要するに好みの違いだから、議論をしても無駄だ。君は君の考えでやったらよかろう。僕は僕の考えで行動する」

3 擬似論理的言辞の駆使

広義における論点相違の最後に、議論の中でしばしば活用される、一見論理的ではあるが、その実、論理とはまったく無縁な言辞について、その代表的なもの四つを紹介しよう。

(1) 「例外は法則を立証する」(“Exception proves the rule”)

たとえば、ある人が「黒人は生来知能程度が低い」などという極論を述べたとする。それに対しては、当然、「馬鹿なことを言うなよ。国連大使

を務めたヤング氏や、黒人運動の指導者だったキング牧師などは、並の白人よりはるかに知能が高いではないか」といった反論が提起されよう。その時、「どんな法則にも必ず例外はある。むしろ、例外があるからこそ法則といえるのではないか。ヤング氏やキング牧師は、『黒人は生来知能程度が低い』という法則を立証する例外なのだ」と論ずるのは、まぎれもなく、不当であろう。「例外は法則を立証する」のではなく、「例外は法則を打ち破る」のである。

(2) 「理論的には正しいかもしれないが、現実の世界では通用しない」

(That is all right in theory, but does not work in practice”)

いまさら説明するまでもなく、正しい理論は現実にも適用しうるものでなければならず、従って、現実の世界に通用しないような理論にはどこか欠陥がある、と考えなければならない。

(3) 「君は、論理的に首尾一貫しようと思うなら、こういうべきだ」(そういうことが必ずしも論理的とはいえない時に)

たとえば、ある平和主義者が「わが国は軍備をもつべきでない。まして、他国と戦争すべきでない」と言う時、それに対して、「君の考えは、論理的につきつめれば、自分の妻が暴漢に襲われた時、暴漢のなすがままにせよ、ということになる。従って、君の考えを認めるわけにはいかない」と論ずるのは、不当であろう。なぜといって、「わが国は軍備をもつべきでない。まして、他国と戦争すべきでない」という主張の論拠と、「自分の妻が暴漢に襲われた時、暴漢のなすがままにせよ」という主張の論拠とは、必ずしも、同一とは考えられないからである。

(4) 「君の質問は論点先取りの不当な質問だ」

相手から徹底的に追いつめられ、もはや、相手の主張を承認するほかにいようなはめに陥った時、ダメ押しのため発せられた相手の致命的質問に

対し、「君の問いに対し私が Yes と答えたが最後、私は、君の主張を承認せざるをえなくなってしまう。君の質問は論点を先取りしている。そのような不当な質問に答えるわけにはいかない」と抗議することは、本末の転倒であろう。